

## 脾脫疽ノ四例

福井縣警察部衛生課

警察醫 長田 八三郎

大正四年八月乃至九月本縣下ニ於テ馬ノ炭疽熱流行シ斃馬ノ燒却及其ノ厩舎ノ消毒ニ從事セシ者之レニ感染シ三名斃レ一名全癒セル四例ヲ實驗セリ本病ハ泰西ニ於テハ決シテ稀有ノ疾病ニアラザレドモ吾ガ邦ニ於テハ未ダ多クアリシヲ聞カズ即チ篠尾、平野兩軍醫ノ一例(明治三十二年陸軍々醫學會雜誌第一〇七號)三宅博士及白銀氏ノ一例(明治三十五年東京醫事新誌第一二六九號)及此ノ報告附記ノ大坂高等醫學校病院ニ於テ澤邊、西村兩氏ノ實驗セル一例、丸茂學士ノ一例(第二回衛生學會演說明治三十八年醫事新聞第六八九號)岡村博士ノ一例(於日本皮膚科學會東京支會第三十八回通常會演說明治四十三年皮膚科及泌尿器科雜誌第十卷第九號)及此ノ報告中ニ記載サレタル日露戰役中滿洲ニ於テ一獸醫ノ本症ニ犯サレ倒レシト云フ一例、淺原博士、倉内二氏ノ五例(明治四十五年中外醫事新報第七六六號)ノ報告アルノミ然シ牛馬ノ本病

ハ吾ガ國ニ於テモ決シテ尠少ニアラザルコトハ農商務省農務局獸疫調査所ノ調査ニ就イテ見ルモ是レヲ窺知スルコトヲ得ベシ是等罹病動物ニ接觸スル者即チ診療解屍ニ從事スル獸醫、死屍ヲ取扱ヒ又ハ厩舎ノ消毒ニ從フ者、飼養者、屠殺者、剥皮或ハ柔皮スル者等ハ實ニ本病感染ノ機會ヲ有スルモノナリ然ルニ吾ガ邦ニ於テノ例前述ノ如ク僅少ナルハ種々ノ原因アルベシト雖一ハ多ク世ノ注意ヲ引キ居ラザル疾病ナルヲ以テ恐ラク確診ヲ經ルニ至ラズシテ過ギ去リシニハアラザルカ

## 第一例

## 死 体 檢 案

福井縣坂井郡栗村濱別所

石、〇、十、〇、〇

六十三年

体格中等大、營養良ナラズ瞳孔左右共散大シ牙關緊急及ビ四肢ノ強直ハ弱度ニ之ヲ現シ左下腿外面中央部及ビ上腿下部ノ内面ニ於テ豌豆大ノ周圍ニ餘リ浸潤ヲ伴ハザル限界判然タル腫瘍各一個ヲ認メ同側ノ鼠蹊腺ヲ檢スルニ數個ノ雀卵大乃至鳩卵大ニ腫張セルアリ

右檢案ヲ行ヒシハ八月二十六日午前八時ニテ死亡セシハ  
前日ノ午後六時頃ナリ既往ノ經過ヲ尋ヌルニ八月十六日  
斃馬ノ燒棄及其ノ厩舎ノ消毒ニ從事シ八月二十三日午前  
ヨリ惡寒、發熱、鼠蹊部ニ疼痛ヲ感ゼシ外何等ノ訴ナカ  
リシト

## 第二例

### 死 体 檢 案

福井縣坂井郡栗村市ノ瀬

青 ○ 友 ○

二十六年

体格中等大、營養佳良、瞳孔左右共散大シ顔面及ビ胸部  
浮腫シ上胸部ニ於テ雷圖狀ニ紫赤色ヲ現セリ腹部ハ膨滿  
シ陰囊ハ非常ニ浮腫シ緊滿、陰囊縫際ニ近ク膿胞ノ破潰  
セシ如キモノヲ認メマタ黒色ヲ呈シ壞疽狀トナレリ兩鼻  
孔左右兩結膜ヨリ暗赤色流動性ノ血液ヲ漏洩シ左右鼠蹊  
腺數個腫張セルヲ認ム

右者八月二十六日午前九時檢案ヲ行ヒシモノニテ既往ノ  
經過ヲ糺ヌルニ八月二十三日俄然惡寒、發熱シ翌二十四  
日午後十一時頃死亡セリト而シテ八月十七日斃馬ノ燒却

及ビ其ノ厩舎ノ消毒ニ從事セシモノナリ

## 第三例

患 者

福井縣坂井郡栗村濱別所

橋 ○ 善 ○

五十八年

現 症 体格中等大、營養良ニシテ脈搏頻數細小、体  
温ヲ檢スルニ三十五度八分、脱汗ヲ認ム胸部ヲ診スルニ  
打診及ビ聽診上別ニ異常ナク腹部ハ稍膨滿ス右下腿外側  
上部ニ於テ周圍浸潤發赤セル一圓銀貨大ノ癰ヲ認メ同側  
ノ鼠蹊腺三、四個腫張シ其ノ大サ雀卵大乃至鳩卵大ニ達  
ス意識昏惰ニ陷キレドモ尙ホ四肢轉々反シ甚シク苦悶ヲ  
感ズルモノ、如シ

既往症 八月二十日頃ヨリ惡寒、戰慄、間歇熱ニ罹リ  
側シナラント思ヒ別ニ醫治ヲ受ケザリシト、八月十六日  
斃馬ノ燒却及ビ其ノ厩舎ノ消毒ニ從事セシモノナリ  
該患者ヲ檢診セシハ八月二十六日午前七時三十分頃ニテ  
同日午前十一時頃遂ニ鬼籍ニ上レリ

## 第四例

## 患者

福井縣坂井郡棗村濱別所

千〇惣〇

四十九年

現症 体格中等大、營養中等ニシテ脈搏八十八、体温三十八度六分ヲ示シ頭重及胸内苦悶ヲ訴ヘ食思ハ全ク之レヲ缺ク胸腹部別ニ異常ヲ認メズ右大腿内側中央部ニ當リ五錢白銅貨大ノ周圍ノ限界劃然タル約〇・五仙迷堤狀ニ隆起セル腫瘍アリ其ノ周圍ハ稍發赤シ中央ハ暗黑色ヲ呈シ同側下肢ノ皮膚淡黃色ヲ現シ該側鼠蹊部ノ淋巴腺數個蠶豆大乃至鷄卵大ニ腫起セルヲ認メ何レモ自發痛及ビ壓痛アリ便通泌結尿利通常ナリ

既往症 八月二十二日ヨリ全身違和、食慾不振ヲ來シ惡寒熱感相往來シ右大腿内側中央部ノ腫瘍ハ始メ該部癢痒ヲ感ゼシヲ以テ之ヲ搔爬セシニ二十日頃之レガ發生ヲ見其ノ中央部ノ黑色ヲ呈スルニ至リシハ廿五日ナリト、該患者ハ入月十六日斃馬ノ燒却及ビ其ノ消毒ニ從事セシモノナリ

經過 始メテ檢診ヲ行ヒシハ八月二十六日午前七時

ニシテ既往症、現症等ヲ綜合之ヲ推スルニ脾脫疽ナラント診定シ血清ノ應用ハ概シテ疾病ノ初期ナル丈ケ多ク効果ヲ奏スルモノナルヲ以テ未ダ細菌學的ノ檢索ヲ終ラザリシモ農商務省ノ右田技師ニ計リ同日午後五時頃農商務省農務局獸疫調査所ノ製造ニ係ル炭疽血清五〇・〇ヲ皮下ニ注射ス同夜体温昇騰少シク苦悶ヲ訴ヘシモ翌二十七日正午頃迄ニハ漸次苦悶モ緩解セリ、本月二十八日午後三時頃マタ炭疽血清四〇・〇皮下ニ注射ス、体温三十八度四分、三十一日体温三十七度八分ニシテ腫瘍ノ中央暗黑色ノ部ハ痂皮狀ニ傾キ周圍ヨリ稍凹陷シ臍狀ヲ呈シ該腫瘍及ビ腫大セル鼠蹊腺ノ疼痛大ニ減退シ又精神モ爽快キニ赴全身症狀總テ良好ナリ

細菌學的檢査 第一例ハ糞便、第二、第三ノ二例ハ血液、第四例ハ腫瘍ノ一小部分ヲ採取シ夫々細菌學的檢査ノ結果、第二、第三、第四ノ三例ハ何レモ脾脫疽菌ヲ証明シ第一例ハ不幸ニシテ陰性ニ陷キリタレドモ之ハ全ク採取材料ノ不適當ニ歸因スベク該患者ノ症狀及ビ諸他ノ關係上脾脫疽ト診定セリ

右細菌ノ斷定ハ當時來縣中ナリシ農商務省農務局獸疫調

查所長心得右田百太郎氏ニ請ヘリ

療法ニ就イテ 從來外發性脾脫疽ニ於テ其ノ感染病竈ノ切開搔爬剔除或ハ白金燒灼、鑛酸、アルカリ―腐蝕又ハ昇汞水或ハ石炭酸溶液、沃度丁幾ヲ其ノ感染部及其ノ周圍ノ皮下ニ注射スル等ノ方法行ハレタリ然レドモ是等ノ方法ハ其ノ感染部位及時期如何ニ依リテハ概シテ効果確實ナル療法ナリト認ムルコト能ハズ却ツテ場合ニ依リテハ症狀ノ増惡ヲ招致スルコトアルベシ又他ノ分裂菌ヲ接種シ或ハ丹毒球菌ヲ以テ處置シタル羊ノ無菌芽性血清ヲ應用スルコトヲ唱導スルノ士アレドモ是亦好結果ヲ齎サルモノ、如シ、千八百九十七年スクラボー及メンデ―ノ兩氏炭疽血清ヲ人ニ應用セシ以來幾多ノ應用者ハ其ノ効力ノ決シテ蔑ルベカラザルヲ證ケリ本邦ニ於テハ明治四十三年岡村博士ガ農商務省農務局獸疫調査所製造ノ炭疽血清ヲ應用セシヲ始メトシ同氏及淺原、倉内三氏ノ所説ヲ綜合スルニ該血清ノ効力ノ存スルコトハ多少認ムベキモ之レガ斷定ヲ下スニハ尙今後多數ノ實驗ニ俟タザルベカラズトセリベツケルハ千九百十一年一例ニベツトマン、ラウベンハイマーハ千九百十二年二例ニ「サルバ

ルサン」ヲ注射シテ効ヲ奏セリト

余ハ脾脫疽ノ病竈即チ癰及ビ腫起セル淋巴腺ニ對シテハ消炎法ヲ行フノ外何等療法ヲ加フルコトヲナサズ獸疫調査所製造ノ炭疽血清ノ應用ヲ試ミタリ余ノ例ハ豫後多クハ不良ナラザル即チ十乃至二十%ノ死亡率ヲ有スル外發性脾脫疽癰ニ屬シ而モ應用セシハ唯一例ナルヲ以テ強チ全然該血清ノ効果ナリト速斷スルコト能ハザレドモ他ノ例ニ於ケル如ク總テガ死ノ轉歸ヲ取リシヨリ考フルニ人間ハ牛馬ノ如ク炭疽菌ニ對シ感染シ易カラズ即チ抵抗力ヲ有スト云フコトノミニ歸スベカラズ若シ血清ノ注射ヲ施スコトナク又ハ之レガ時期ヲ逸セシナランニハ或ハ豫後不良ニ陷キリシヤモ測リ知ルベカラズ猶今後數多ノ實驗及ビ報告ニ俟タント欲ス

尙茲ニ獸疫調査所製造ノ炭疽血清ニ就イテ述ベント欲スルハ其ノ副作用僅微ナルコトナリ即チ後藤本縣警察部長ノ命ニ依リ左記ノ如ク二百九十八名ニ該血清ヲ豫防ノ目的ニ注射ヲ行ヒシガ之レガ發現ヲ見シハ四名ニシテ即チ一・三%弱ナリ、該注射ハ豫防ノ目的ノミニ行ヒシニアラズシテ人ノ炭疽熱ニ感染シ不測ノ最期ヲ遂ゲシヲ見聞セ



[illegible]

[illegible]

## 雜 錄

右注射ハ總テ炭疽熱患者死者患馬斃馬ノアリシ家族、斃馬ノ燒却及其ノ厩舎ノ消毒ニ從事セシ者及發生部落ノ畜主家族等其ノ希望者ニ就キ健康診斷ヲ行ヒ血行器、呼吸器或ハ其ノ他特ニ疾患ナキ者ヲ選ミ之ヲ施行シ又疾走勞働直後ノ者ハ暫時間安靜ナラシメテ之レヲ行ヒタリ而シテ注射ノ當日ハ過激ナル動作ヲ避ケシムルハ勿論可成的安靜ヲ守ラシメタリ

注射部位ハ肩胛間部ノ皮下ヲ選ミ注射量ハ十歳以上二十歳五・〇―八・〇 二十歳以上五十歳一・〇・〇 五十歳以上七・〇―八・〇トセリ

副作用ハ輕微ニシテ左記ノ四名ニ目撃シ注射後二、三十分ニシテ發現シ二、三時間後消退緩解セリ

注射局部ノ疼痛ハ一モ訴ヘシモノナシ

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

### ●俱利伽羅紀行 附 マラソン競走

知 原 生

九月廿六日(日曜)俱利伽羅の古競場を訪ひ、兼ねて途中津幡迄有志者のマラソン競走を行へり。

午前六時淺野川大橋に集合、有明の月は、尙、中天に懸り習々たる朝風は征衣を吹いて爽なり。マラソン競走の出發は午前六時廿五分、橋上ミヅろミ踏みならして駈け行く雄々しき姿、道行く人の膽を寒からしめて、わが醫專の元氣を示すや夥し。これに續いて一行は意氣揚々として出で立つ。進み行く中に、こよなき天氣と思はれし空のたゞすまひ、忽ち變じて黑雲いつしか満天を被ひ盡し驟の如き雨は霏々として下り始む。されど男子の意氣、窮によりて、益々激す。吾等一行の勇氣、元より阻むべくもらず、寧、益、旺盛也。前呼び後答へて、語りもて行く中に、いつしか津幡の町に着く。マラソン競走の決勝點はこゝにして金澤を離るこゝ三里に餘れり。一行は先着の勇士をねぎろふべく、こゝに、最初の休憩をなす。やがて細雨止みて、日光僅に雲間に洩る、一行は津幡の町を東へ通り過ぎて、竹橋に出で、石動に通ずる北陸道を捨て、俱利伽羅の舊道を上る。ゆきかふ人も、跡絶えて、八重葎、道を塞ぐ、長蛇の如く一列をつくつて、上ることいくばくもなくして、豁然として、眺望、にはかに、展開されぬ。

天も悠々、地も悠々、重疊なす山々は雨後の綠、一際、滴るばかり也。海は渺茫として天に連る。人もわれも自らを忘れて恍惚たるこゝ多時。更に